

第二十二條 拍子あひ問曲の事

底本…高知本 対校本…鴻山本

【翻刻】

第二十二 拍子あひ曲の事

此曲、うけをしの曲共申候。拍子をよく①請取、謡の句を待也。惣してまちかねてうたひいたすハ、たとへ拍子にはつれねども拍子はずれと申て、元来不拍子より出たれハ、音曲者のちしよくとする事也。たとひをそきやうなりとも、程にあひ申をよき拍子といふ也。拍子をまたす、句を請すして程に至らぬを、②賤しきする也。程はまた拍子のあひにて候。かならず程をわすれ給ふへからす。

たとひつゝ、ミに打切所なくとも、いきあひ③つまらず、句の所の前の字を程にて引きらハ、句のあひをつゝ、ミより打きらてかなふへからす。其時程にてうたひ出すへし。是ハ初心の人達へのをしへ、此道よくしれる人ハおしへに不及事にて候。

【校異】

- ① 請取―請て(鴻)
- ② 賤しき―いやしと(鴻)
- ③ つまらす―つまらば(鴻)

【現代語訳】

第二十二 拍子の間の曲のこと

このわざは「うけおしの曲」ともいう。鼓や太鼓の打つ拍子をよく聞いて受け取り、謡の句切の間を待つことである。総じて、間を待ちきれずに謡い出すと、たとえ鼓の打つ拍子に外れなくとも、「拍子外れ」というべき、間の悪い謡になつてしまう。これはそもそも謡のリズムを体得していないから起こることであり、謡を嗜む者にとつては恥ずべき事である。たとえ鼓の音より遅れて、音に合わなかつたとしても、程の間に合うのが理想的なリズムなのである。鼓の音を待たず、句切の間合いを十分受けとめず、程の間に入れない謡は、趣に欠けて聞き劣りするものである。程とは拍子のあいだ、つまり鼓の音と音のあいだのことである。程が大事だということを決して忘れてはいけない。

たとえ囃子が打ち切る所でなくとも、息が詰まつたならば、句切の前の字を、鼓の音と音の間で引き延ばせば、鼓方は打切を打たずにはいかない。鼓が打ち切つたならば、鼓の音のあとから謡いだせばよい。これは初心者への教えであつて、この道に通じた人には教えるまでもないことである。

【解説】

本条の要点は、第一段落（原文には段落なし）最後の「かならず程をわすれ給ふへからず」に集約されている。「程」の重要性については金春禪竹が度々説く所であり、『五音三曲集』では次のように原理的に述べている。「一、程拍子之事。万事、程よりなすべきなり。拍子よりするは、小さき也。天地未分は程なり。開闢は拍子なり。万物此程よりおこる所なるべし。又、程の内に拍子あり、拍子のうちに程ある事を可知。（後略）」（適宜漢字に直した。以下同じ）。『六輪一露秘注（文正本）』では同じ内容を述べたのち、演奏に引き付けて、「俗に下手なるは、一切、拍子を躰にして、程と云事を不知」と苦言を呈している。

「拍子」と「程」にはそれぞれ複数の意味があるが、このように拍子と程を対概念とする時は、拍子は音となつて現れる打点、程は拍子（打点）と拍子（打点）の間の、音のない間（ま）のことである。拍子は、それが音となる前の程において芽生え、生み出されるものであり、生み出された音がまた次の程を生む。その生命活動ともいえる活き活きした律動のために「拍子の間より謡出し、程より拍子に移り、合ふて合わぬ心もち」（『謡之秘書』）を体得しなければいけないのである。従つてタイトルの「拍子あひ曲」は、「拍子（打点）に合、曲」ではなく、拍子と拍子のあいだ、つまり「程に関するわざ（曲）」のことと解釈すべきだろう。

著者は、句切のところの間を待ちきれずに謡い出すのは謡い手の恥辱とまで述べ、端的に、程に合うのが良い謡い方、程に至らぬのは悪い（いやしい）謡い方であると断言している。具体的な例が示されないためその内容は定かではないが、左のような推測ができるのではないだろうか。

拍子に合わせる謡 (拍子当たりは古式、囃子は古形の三地パターンとした)

8	
	ヤ	
1	△	は
2	る
	ハ	が
3	○	す
	ハ	
4	○	み
	ヤ	た
1	△	な
2	び
	ハ	き
3	△	に
4	け
	ヤ	り
5	○	ひ
6	さ
	ハ	か
7	○	た
	ハ	
8	○	の

句を待ち程に入る謡

8	
	ヤ	
1	△	★
2	は
	ハ	る
3	○	が
	ハ	す
4	○	★
	ヤ	た
1	△	な
2	び
	ハ	き
3	△	に
4	け
	ヤ	り
5	○	★
6	ひ
	ハ	さ
7	○	か
	ハ	た
8	○	★

★印は「句切で待つ」ところである。「春霞」の「は」や「み」、「久方の」の「ひ」や「の」を大鼓の打音(△)や小鼓の打音(○)に当てずに、打音を受けて程から謡い出すのがよい。それぞれ★の箇所、ほどよい間合いを創るのである。実際の打音は、時により早く打たれることも遅く打たれることもあるが、このように拍子を受ける句切の間を設定することで、謡い手が自分の呼吸とセンスに応じて適切に謡い出すことが(従って息継ぎも)できるのである。また「たなびき」の「な」も大鼓の打音を聞いてから謡い出すのがよい。地拍子の変化が、こうした意識と唱法によって進んだことが推測できる。

第二段落は、一呼吸置きたい時などに、句切の所で謡を延ばして囃子に打切の手をリクエストする方法。当時の約束事として他書にも散見する内容である。末文の「是は初心の人たちへの教え」の「是」は、本条全体を指すと

も考えられるが、前段落が末文の「かならず程をわすれ給ふへからす」ですでに総括されていることから、ここでは第二段落のみを指すものと解釈した。

本条も「道見在判伝書」の「音曲十五之大事」を典拠としている。左に示すように本条の場合は殆ど同書の条文をなぞる形になっている。但し破線部は本書になく、特に最後の一文「拍子相の曲の能ハゆや也、此諷にあり」の意味は未詳である。両書にみえる「うけおし」については後述した。

第十五、拍子あひの曲と云事、是をうけおしの曲とも云、拍子をよくうけて、うたいの句を待也、まちかねていひ出すハ、拍子にはつれねとも、是ハ拍子はつれといて、ひけふ（非興か…訳者注）也といふ、音曲者のちしよく也、おそくしてほどにあふハよし、拍子をまたす、句をうけすして程にいらさるハ、稽古のうすきはしめなり、程ハ拍子のあいなり、ほとをわするへからす。

縦つゝ、みにうち切所なくとも、いきつまらば、句の所の前の字を程にて引きらは、句のあいをうちきらてかなふへからす、其時ほとにていひ出すへし、但これハしよ心なる者之事也、其道をしりたらんハ、たかひにほねおる事なし、たすけ合へし、専一候、拍子柵（異本二種は「あひ」…訳者注）の曲の能ハゆや也、此諷にあり。

◆「うけおし」について⁴⁾

「うけおし」は金春禪鳳が好んで使った言葉であり、『禪鳳雑談』に記事として四ヶ所、『反古裏の書（三）』の名目として二ヶ所に登場する。『禪鳳雑談』から二例を挙げよう（適宜漢字に直した）。

永正十二年二月十九日夜、坂東屋に被留候て雑談有。^①琵琶、箏の緒を調むるまでは、謡のふしのごとく也。其後うけおしの心もち、肝要にて候由、被申候。是は大事の秘事と存候。^②

永正十三年十一月五日、坂東屋に被留候。雑談有。^③謡の内のべしぢめ事たとへ、琵琶の左の手にてうけおしのしつらひ候也。面白候。うけおし・つめひらきは是にて有。うけおしの物語、言語道断、殊勝殊勝。^④

現在俗箏には、弦の押し方・放し方によって調弦音より高い音を出したり余韻にポルタメントをかけたたりする、「押し手」といわれる左手の手法があるが、^①禪鳳は、琵琶や箏が、規定通りの調弦と演奏に加えて、左手の絃の操作による微妙なニュアンスを肝要としていることを知り(傍線①)、そのことと、謡における間の取り方との間に、音楽表現としての共通性を見出して興味深く思ったようである(傍線②)。「うけおし」の「うけ」は、拍子をよく受けるという意味、「おし」とは、遅らせる、ずらすという意味と思われる。拍子を受け止めつつ遅れ気味にずらす、という微妙な間の表現技術が「うけおし」であろう。この言葉は禪鳳以前には見当たらず、前項の「枕拍子」と同様、限られた範囲での使用にとどまっている。

注

- (1) 『金春古伝書集成』(一九六九、わんや書店) 一八四頁。
- (2) 同前、二六一頁。
- (3) 慶安五年刊。引用は二六六一―二六七頁。
- (4) 以下の内容は『能と狂言』22号(二〇二四、能楽学会)の拙稿で既述した。
- (5) 注1、四三八頁。
- (6) 同前、四五六頁。
- (7) 『日本音楽大事典』(一九八九、平凡社) 二四二頁。雅楽以外の各種琵琶では弦を「しめる」という(同前)。

(高橋 葉子)